クイズに答えて素敵な商品をGET

Q 4年に1度のワールドカップ。われら日本も遥かブラジルにて
高温多湿の悪条件のなか健闘してくれました。
では数ある強国を退け栄えある優勝を手にした国は
どこだったでしょう？

① 日本　② ドイツ　③ ブラジル　ヒント…ビール消費大国で有名な国といえば？

応募方法　**プレゼントの応募方法…同封のハガキ解答欄に回答をご記入の上、御返信下さい。**

抽選で各 ㋐ ドイツビール飲み比べ8本セット（5名）
㋑ ドイツ農業協会金メダル連続受賞“スライスハムとウインナーのセット”（5名）
㋒ 和歌山県産柿詰め合わせ（5名）をプレゼントいたします。
いずれかご希望の商品をご記入下さい。

応募期間　2014年10月31日（金）（消印有効）まで

当選発表　商品の発送をもって当選とさせていただきます。

皆様のご応募お待ちしてます

子供たちの社会科見学

7月3日、地元の小笹小学校の子供たちが社会科見学に来てくれました。この日は朝から大雨に雷と悪天候だったため、これは中止になるかなぁと心配しましたが時間になると色とりどりの傘をさした子供たちが続々と訪れてくれました。

子供たちも普段は石に接することがないため何事にも興味津々。世界で採れる石の話に、原石を切り出している映像鑑賞、また実際に石をノミとせっとう（かなづち）を使って叩いてもらうと大喜び。こちらから何か質問すると一斉に手を挙げて大きな声で答えてくれました。

あっという間の社会科見学でしたが七夕が近い事もあったので子供たちに願い事を書いてもらうと、そのなかに一人“いしやになりたい”と書いてくれた男の子がいました。

はたして10年後、その夢が叶うのか別の夢を追いかけるのか…いまからとても楽しみです。

▲
重たいせっとうを振りかざして石を叩きますがノミに当てるのも一苦労です。ガンバッテ！

ご意見・ご感想・質問などどんなことでもお便り下さい。

創業300年 技術の
國松石材株式会社
平尾店／福岡市中央区平和3丁目12-27（平尾霊園下）
TEL 092-401-4194　FAX 092-401-4189
工　場／福岡市東区松田3-6-12
TEL 092-629-1189　FAX 092-629-2043
http://www.kunimatu.com　国松石材　検索

編集後記

社会科見学に来てくれた子供たちの元気な姿をみて、ふと昔の自分を思い返しました。あの頃の僕は遊ぶ事と食べる事しか考えていませんでした。…(笑)
皆様の子供時代はいかがでしたか？？

（國松太朗・田中俊晴）

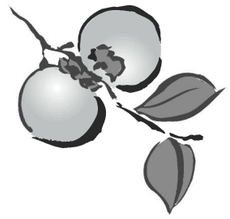
國松石材がお届けする手作り新聞　2014年秋号　第27号

松ぼっくり

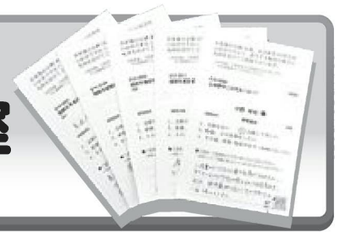
1 季節の小話
2 お墓の相談室「疑問・質問にお答えします」
3 第27回 町名散歩「天神」
4 お墓参りっていいね！
「お墓参り」の感動的なエピソード
第3回 女優・室井滋さん
5 6 お客様からの声
7 國松さん、今なんしようと？
國松石材スタッフ紹介
8 クイズに答えて素敵な商品をGET！

季節の小話

秋と言えば「柿」と最近はあまり言わないかもしれませんが、私が小さい頃はよく食べていました。
そんな柿は健康にもすごく良いことをご存知ですか？
柿に含まれるビタミンCの量は、日本人が食べる果物の中でもトップクラスです。
風邪予防や美肌効果が期待できますし、発がん抑制作用、二日酔いにも効果があります。
柿と言えばこんな言葉を聞いた事があります。「梨も柿も放生会」です。説は色々あるみたいですが、放生会へ連れて行ってという子どもに対して、家事や仕事が忙しかったり、家計の都合で、適当に理由を付けて誤魔化す親が『なしや～？なしや～？」（博多弁で、なし=何で？）としつこく聞く子どもに「しぇからしか（うるさい）！なしもかきも放生会たい！」と言い聞かせていたのが流行ったと聞いたことがあります。
この話、親子がほのぼのとして心が温まり私は大好きです。
お彼岸も過ぎれば秋も深まります。今年はそんな柿を食べながら秋を感じられて下さい。

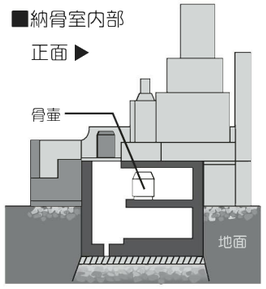


お墓の相談室
疑問・質問コーナー



納骨室特集

納骨室＝墓石の下（たいていは地下）にあって
遺骨を安置する納骨室（カロート）のことです。
カロートの語源は「カラウド」（唐櫃）で、
「死者を葬（ほうむ）る棺」という意味です。



Q 質問　お骨を安置するスペースに空きが無くなってきました。何か良い方法はありますか？

A 回答　仏式であれば一般的に33回忌もしくは50回忌を弔い上げ（供養がととのった）といわれ、お骨を合葬して良いと考えられています。
合葬する方法はいくつかありますが、納骨室の土部分に、お骨を還す方法や、弔い上げになられた、お骨を細かく砕き骨壷のスペースを空ける粉骨、また寺院様によっては、お骨を合葬する納骨堂をお持ちの場合もございます。
このほかにも省スペース化を計る提案もできますのでお困りの方はご相談ください。

Q 質問　納骨室に水が入らないか心配です。何かいい方法はありませんか？

A 回答　納骨室入口からの水の侵入が多くみられます。
納骨室入口にフチ石を作り防ぐことができます。

施工前

施工後

Q 質問　納骨室の中がどうなっているか心配です。中を見ることはできますか？

A 回答　納骨室の中を見ることはできます。
専門の作業スタッフによる納骨室の点検（有料）をしています。

ご質問がございましたらご遠慮なくご一報下さい。

第27回 町名散歩 天神

曹洞宗　大湖山　安國寺

天神の名は江戸時代に当地へ遷宮された天神様を祀る水鏡天満宮に由来します。現在の明治通りの那珂川から西鉄グランドホテル前までの道沿いが、江戸時代の天神町（てんじんのちょう）でした。

そんな天神で、今回は曹洞宗の専門僧堂である安國寺を歩いてきました。

専門僧堂とは、日本の禅宗において僧侶が住職の資格を得るために一定期間修行する研修機関のことを言います。

僧堂は仏教の寺院内にある建物の1つで、修行者（僧侶）が集団生活を行いながら仏道修行に励む場です。

安國寺は慶長5年（1600年）、豊前から筑前の国主となった黒田長政公が、 天翁全補禅師（てんおうぜんぽぜんし）のために、 豊前の安國寺を移しました。寛永12年（1635年）に火災で消失しましたが、 2代藩主忠之公の援助で再興されました。

安國寺にはこんな話がありますのでご紹介致します。「飴買い幽霊」のお話です。

『毎晩、丑三つ時（午前２時ごろ）になると飴屋の表戸をトントンとたたいて、若い女性が飴を買いに来ます。不審に思った飴屋の主（あるじ）がある日女性の後をつけていくと、安國寺の中にフッと消えていきました。境内には新しい卒塔婆が立っていて、地中から赤ん坊の泣き声がします。お寺の住職と墓を掘ってみると、亡くなった母親から生まれた赤ん坊がいました。乳も出ず、死ぬに死にきれぬ母親が幽霊となり、飴で我が子を育てようとしたのでしょうか。墓から取り出された赤ん坊も、日を経ずして亡くなりました。お寺の記録によると延宝７年（1679年）のことです。今も安國寺の境内には「岩松院殿禅室妙悦大姉」と彫られた女性の墓が建っています。その横にしがみつくように立っている墓には「童女」と刻まれています。』子供を思う親心の大切さを伝えているようです。

安國寺には、大梵鐘楼堂や仁王像などもありますので、ぜひ一度足を運んでお参りしてみて下さい。

飴買い幽霊の墓

大梵鐘楼堂

「お墓参り」の感動的なエピソード

お墓参りって いいね！

第3回　女優 室井滋さん「私のお盆」

室井滋著『すっぴん魂』（文藝春秋）より

8月に入るなり、私は故郷の富山に帰省した。

今度のお盆は、休みがどうしてもとれず、墓参りに帰れそうにもないからだ。

日帰りで、せわしないとは思ったが、やっぱり気になったので、一足早いが私の『お盆』をしようと朝一番の列車に飛び乗った。

時間が無いのに、あえて飛行機にしなかったのは、『お盆』への自分なりのこだわりが少なからずあったからだ。普段のあわただしい日常から離れて、この時ばかりは、窓の外の景色をボケーッと眺めて田舎に向いたかった。

遠い昔を儀式のように思い出そうとするわけでもなかったが、列車が先に進めば進むほど、なつかしい景色、なつかしい匂いが私を包み込んだ。そして、すでに他界した、父の顔、母の顔、祖母の顔が次々に浮かんでは消えた。

私は長岡名物の「まいたけ弁当」を頬ばりながら、「菊の花は抹香臭いから、今年のお盆はバラの花で行くぞ」とか。「お酒はやっぱり父さんのお気に入りだった『銀盤』かな」などと一人、今日一日のプランをあれやこれや立てた。

そうしているうちに、列車はトンネルを抜けて、右手には日本海が広がり、私は我が町へ、あっという間に到着した。

私は駅に着くなり、どこにも寄らず、真っすぐお寺に向った。

「ちょっと早いけどさぁ、この墓地中でうちが一番だからね。お盆の本番13日頃には来れないんだけど……でも大丈夫。10日後にもピカピカで誰に見られても恥ずかしくないように頑張って磨いて行くちゃあね」

さっそく墓石の陰で作業衣に着替え、私は墓そうじを始めた。

バケツにたっぷり水を汲んできて、裸足になって墓石をゴシゴシ擦ってゆく。小気味好いほど、苔やドロがボロボロ落ちる。

「ほーら、気持ちいいでしょ。まるで一番風呂でアカスリしてるみたいなカンジやよね」

勿論、御影石そのものではなく、墓の中の私の家族に話しかけているつもりだった。

寺の奥の墓地には人影なぞなく、私一人きりだとばかり思っていたので、ついついひとり言が大声になっていたに違いない。

時々笑ったりして喋る私に興味を持ったらしいおばあさんが、ふいに声を掛けてきた。

「あれあれ、お暑いのに精が出られるわねぇ」

突然だったので、私はちょっとバツが悪かったが、それでも愛想良く。

「はぁ……ホントに暑いですねぇ」と、答えた。

自分が墓そうじの一番乗りとばかり思っていたが、もう他にもやって来る人があったかぁ……と、私は何とはなしに、おばあさんを墓石のてっぺんを磨きながら眺めた。が、おばあさんはおばあさんで、何故か私とうちの墓をジーッと見比べ、その場につっ立ったまま先に行こうとしない。

そのうち、

「ここ、女優の室井滋さんの家のお墓やろげ？」

と、声をやたら潜めて近づいてきた。

人口3万人の小さな田舎町では、テレビに出る町出身のタレントはとても珍しく、私と私の家の墓はけっこう知られているようだった。

「去年のNHK朝ドラ「走らんか！」の草苅正雄さんの奥さん役、なかなかいかったちゃねぇ」とか何とか言って、さておばあさん、握手を求めてくるのだな……。

私はすっかり自惚れて、早計にもタワシを握っていた手をバケツの水でチャボンと洗い、Tシャツの裾で拭いて、先にスタンバって手を出しかけた。

ところが、次におばあさんの口から飛び出たのは、全く予想外の言葉だった。

「あんたさん、この墓磨いて、いくらほど貰われるんやろか？」

「はあ！？……いくらって？」

「だって、やっぱし女優さんやから、たくさん出されるんやろうと思うて、墓そうじにも……」

どうやらおばあさんは、私のことを、女優の室井さんから墓そうじに雇われた人とすっかり勘違いして、好奇心からアルバイト賃を尋ねているらしかった。

すすけたボロのTシャツにゴムの伸びきったジャージ、汗だくのこのスッピンフェイスを見りゃあ、確かにそう思うのも無理はなかった。

私は何と答えたものかと躊躇ったが、

「え……ええ、室井さんからは……ほどほどに、いっぱい貰っとるがです」

と、何とも曖昧な答え方をしてしまった。

おばあさんは、「へぇッ……ほどほどにいっぱいかね……そりゃいかったちゃねぇ」

と嬉しそうに言うと、隣りの墓石の端っこの方にちょこんと座り、一服し始めた。

私は、このまま、このおばあさんに、女優の室井さんのことを根掘り葉掘り聞かれてはたまらないと、踵を返して自分の仕事に再び打ち込んで、それっきり自分からは口をきかなかった。

おばあさん方も、それ以上何を言うでもなかった。ただ、どうしたことか、その場からはなかなか立ち上がらない。私の一挙一動を麦藁帽の下からジーッと見守っているようだった。

さて、やがて、墓は磨き上がり、草むしりも済み、お花、お酒を供え、線香やろうそくに火を灯して、いよいよお参りをしようとした時だ。

両手を合わせて、目を閉じた私の耳元に「ブ～ン」という蚊の鳴く高い音がした。

私は耳ざわりな音に反射的に目を開き、蚊をたたきつぶそうと、合掌していたその両の手で、何度か空を叩いた。

なかなかつぶせず、蚊を追えないでいると、横でそれまで黙って休んでいたおばあさんが、急に口を開いた。

「お参りしとる時に、体の周りに寄ってくるのは、お墓の中の仏さんの化身やから、殺生したらだめやちゃね。それが、たとえ蚊でも、ハエでも、ハチでも。今のその蚊、きっと室井さんの家の死なれた誰かやぞいか」

私はドキリとなった。

おばあさんの言葉の内容に驚いて……というより、以前にこの墓の前で同じことを言われたのを思い出したからだ。

それは、子供の頃、お盆の墓そうじに来た時に、刺された私の右腕を水で冷やしながら祖母が言った言葉だった。

「シゲちゃん、我慢やぞ、今、刺してった蚊は私の連れ合いで、あんたのじいちゃんやからね。ハハハ、じいちゃんの、今年も待っとったよって合図やから。かゆくてもガマン、ガマン！」

かゆみに耐えかね掻き毟る私を、やさしくなだめてそう言ったものだった。

そういえば、このおばあさん、麦藁帽でよく顔が見えないが、私の祖母にどことなく似ているような……そう思って、私は改めておばあさんの方を振り返った。

隣の墓石の前にはもうおばあさんの姿はなかった。

「お参りしている時に体の周りに寄ってくるのが仏さんの化身なら……あの蚊じゃなくておばあさんってことも……ひょっとして……」

東京へ戻る車中、私は富山名物、ますの寿司を頬ばりながら、ちょっと不思議だった自分のお盆を思い返して楽しんだ。

室井滋著
『すっぴん魂』（文藝春秋）
発行日　1997年9月10日

お客様の声

國松石材とご縁をいただいたお客様の
温かいメッセージをご紹介します

「全優石の お墓コンクールに応募し 特別賞を受賞し よい記念になりました。」

早良区にお住まいの
山永様ご家族

お墓は終の棲家ですが、私達夫婦がこの世に存在した証としてのモニュメントとして考えています。

お墓を建てるなら洋風のお洒落なお墓にしたいと思い、私達のイメージのお墓を作って下さる石材店が見つかるかどうか案じていましたが、先に墓地を購入しておいた霊園に相談したところ、國松石材さんを紹介して頂きました。享保2年創業300年の歴史がある会社ということで即決しました。

複数案の中から最終案を決めるまで紆余曲折がありました。石材は輸入品で決まっておりましたが、急遽国産に変更し、石碑も修正を色々しましたが、いつも快く対応して頂きました。

石材を決めるのに、実際に他の霊園を案内もして頂き、イメージを確認する事ができました。

また、國松石材の工場を案内して頂きましたが、整理整頓が行き届き、機械工場のように機械が並んでいて、女性の方が重たく硬い石を加工しているのには驚きました。石碑を加工する若い男性の方が、手ノミと電動ノミで削る姿はまさしく芸術家で、私がイメージした以上の仕上がりでした。営業、デザイン、加工、施工とチームワークがよくとれてると感じました。

お陰様で満足できるお墓が出来上がり、國松石材さんには大変感謝しています。

記念に全優石のお墓コンクールに応募したところ、特別賞を受賞しよい記念になりました。また、意匠登録も取得する事ができました。

国産の石を使いながらも、洋風でシンプルなデザインになっており、こだわりが感じられるお墓になっております

担当者からひとこと

山永様と最初にお会いしたのは、昨年の3月春でした。完成が11月ですので、8ヵ月間弱と時間がかかり申し訳なく思っています。文字彫刻や石の加工にもすごく関心をもたれ、ご夫婦でノミを持たれ、石と触れ合って頂きました。モニュメントの部分も、ご主人様が原寸代のダンボールでイメージを作っていただき、ご希望により近く完成することができました。

ご家族一緒にお参りできるお墓ができて嬉しく思いますし、ご夫婦の愛情をたくさん感じました。私自身も将来、山永様のような思いやりのある家族で、楽しい生活ができればと思います（目標です）。山永様これからも末永いお付合いのほど、宜しくお願いいたします。

お客様係　森　裕二

お客様の声

國松石材とご縁をいただいたお客様の
温かいメッセージをご紹介します

「希望以上の立派なお墓が出来あがり家族一同皆喜んでおります。」

博多区にお住まいの山岡様ご夫婦

この度、私共は小倉にあります本家墓の隣に、長い間の念願でありました寿陵のお墓を國松石材店様のお力添えにより建立致しました。

きっかけは1枚のハガキから。お墓に関する冊子をお送り頂き当石材店様のお墓に関わる内容に感銘を受け、お願いした次第です。

高台で道幅も狭い場所で大変な作業にも係わらず、何度も入念な打ち合せをして頂き、工事の取り掛りから出来上がるまでの記録を写真などでも頂き、大変良い記念になりました。

私共の希望以上の立派なお墓が出来上がり、家族一同、皆、喜んでおります。

長い間、私共の両親は本家の墓に眠っておりましたので、建立式の当日はご住職のお経のあいだ中、新墓への移し替えなど、ずっとお世話をして頂き、頭の下がる思いでした。

幸い家内も先祖供養には骨身を惜しまぬようで、結婚以来50数年博多～小倉への墓参りは年に数回同行したものです。

何はともあれ、この度は、すばらしいお墓を建立して頂き、お礼の申し上げようもない程、心から感謝致しております。

本当にありがとうございました。

色々なお墓を見て細部まで研究された、こだわりのオンリーワン伝統的な和型のお墓が完成しました。

担当者からひとこと

山岡様は博多区にお住まいですが御本家のお墓参りへ毎年かかさず小倉まで行かれています。

ご夫婦の仲がとても良く何を決めるにもお互いの気持ちを尊重されていらっしゃいました。

ご夫婦の思いの詰まったお墓のお引き渡しの時のお二人の笑顔に私も自然と笑顔になっていました。

この度はご縁をいただきありがとうございました。

お客様係　國松（くにまつ） 太朗（たろう）

國松さん、今なんしようと？

『崇福寺山門参道敷石工事』

山門前 全景

博多区千代町にある崇福寺。正式には「横岳山勅賜萬年崇福禅寺」という臨済宗大徳寺派の古刹です。

今は博多にある崇福寺は元々は仁治元年（1240年）に筑紫郡太宰府町横岳の地に随乗坊堪慧（ずいじょうぼうたんえ）によって創建されました。翌年、博多祇園山笠発祥の地とされる承天寺を開山された聖一国師が宋より帰朝されると湛慧は国師を迎え開堂演法を請うと、国師は宋の経山佛鑑禅師より授かった「勅賜萬年崇福禅寺」の寺号を揚げ、ここに崇福寺としての歴史が始まりました。

長きにわたり太宰府の地を護持してきた崇福寺でしたが天正14年（1586年）に岩屋城落城（島津、大友氏の戦）の際に兵火により勝禅院を残し、寺の大部分を焼失してしまいます。

その後、大河ドラマ軍師官兵衛で脚光を浴びている黒田官兵衛の長男で初代筑前福岡藩主となった黒田長政公の手により慶長5年（1600年）崇福寺は黒田家菩提寺として現在の地に移転再興されました。

境内には福岡城本丸表御門を移した山門、名島城の遺構と伝えられる唐門（県指定文化財）、黒田家墓所はもちろんのこと、玄洋社、嶋井宗室など激動の時を生き抜いた志士たちの墓があり参拝される方は後を絶ちません。

現在、弊社は崇福寺山門前の敷石貼り工事を施工させていただいております。総面積は113㎡という大工事で高さ2.4mの大燈籠を配して11月初旬の工事完成を予定しています。

慎重に縁石を据付

崇福寺　福岡市博多区千代4-7-79

営業担当／松井篤　工事担当／溝添篤史・松尾誠也・小椋淳凱

國松石材スタッフ紹介

崇福寺様の敷石には岡山県犬島の御影石を使用しています。
11月には同じ犬島で採れた御影石を使った燈籠も完成します。
ご興味がある方は是非訪れてみてください。

営業部　松井（まつい） 篤（あつし）

■ **生年月日** ／ 1978年8月4日生まれ　■ **血液型** ／ A型
■ **資格** ／ お墓ディレクター1級（日本石材産業協会認定）・全優石お墓相談員
■ **最近楽しんでいること** ／ DVD鑑賞（主に洋画）